

風土論はなぜ社会学ではなく倫理学なのか

——和辻哲郎とアーウィング・ゴフマン——

太田和彦

一 概要…和辻風土論における

秩序構築の二つの方向性について

本論文は、和辻哲郎の風土論とアーウィング・ゴフマンのフレーム理論を比較し、社会学的観点と倫理学的観点の両方から分析することで、「風土」概念の実践面における有効性を理論的に明らかにする。参照した主な文献は、和辻の『風土』（一九三五）ならびに『人間の学としての倫理学』（一九三四）、ゴフマンの *Frame Analysis*（『フレーム分析』一九七二）である。論考は以下のように進められる。まず、風土論において、実存主義的な位相（「人間存在の構造契機としての風土性」と地理学的な位相（「風土の類型」）の統合に和辻が失敗しているというオグユスタン・ベルクによる批判と、亀山純生による再批判に注目する。この意見の相違を検討するために、風土論とフレ

ーム理論の比較思想的分析を行う。この分析により、和辻が風土論および解釈学的倫理学において、（A）間柄に関連する諸「表現」を手掛かりにして、実践的行為連関のなかで生じた秩序（相互行為秩序）があるべき社会秩序へと拡大する方向性と、（B）原理や中心的枠組みに基づいて倫理的行為の体系（あるべき社会秩序）から実践的行為連関の秩序が演繹的に構築されるという方向性が、間の思想のもとで相補的に組み上がると構想していたという整理が可能となる。この整理をふまえることにより、持続可能な社会の実現のための国際的な枠組みを地域自治体単位の活動に再文脈化するという実践的課題や、日本において特徴的とされる規範的な作用（例えば、場の空気など）の解釈などの理論的課題に、風土論を介した検討が可能となると考えられる。

二 序論…和辻風土論への批判と応答の整理

今日、政治的な意思決定の仕組み、流通網、消費など、社会のさまざまな領域における、持続可能なシステムへの転換／移行 (Sustainability transition) が、国際的な条約や提言を通じて、各国政府や国際機関に求められている。そのなかで、現行の硬直化した社会構造を柔軟なものへと解きほぐすための概念や理論の創出が、社会学や経済学、政治学、哲学などの諸分野の研究者に求められている。これらの調査研究において基調となっているのが、共同体・地域レベルに準拠するローカリズムである。本論文は、前記の取り組みに関して、地理学の哲学ともいふべき和辻哲郎の「風土」概念が一定の寄与を果たし得ると見なす。風土論の実践面での有効性に関する先行研究は、一九九〇年代から環境倫理学や環境社会学、人文地理学を中心に、国内外で発表されており、今後のさらなる展開が期待される⁽¹⁾。

だが、和辻風土論の実践面の検討においては、大別して三種類の批判がある。まず、(一) 風土論は環境決定論であるという批判である。これは「風土」第二章で述べられる「風土の類型」⁽²⁾ に対して、主に人文地理学の立場からなされたものである。次に、(二) 風土論には、客観的な倫理的規範を明らかにする理路が欠けているという批判である⁽³⁾。そして、(三) 風土論の、実存主義的な位相と社会学的・地理学的な位相の統合に、和辻は失敗しているとするオギユスタン・ベルク「空間の間

題…ハイデッガーから和辻へ」(一九九七／一九九七) における批判である。

それぞれの批判については、以下のような応答が可能である。まず、(一) の批判に対しては、和辻自身が環境決定論を否定している⁽⁴⁾。それにもかかわらず、「風土」環境決定論として評価された原因として、高野宏は風土類型論の記述分析における因果律が、和辻が主張する理論の指し示す方向性と合致していないことを挙げている⁽⁵⁾。つまり、理論的には当該地域の人々が人間存在を環境条件のなかに間主観的に見出し、それを文化的産物に表現したと記述すべきところを、同章では環境条件がその地域の文化を規定するような記述が多いため、環境決定論という評価が下されたものと考えられる。

また(二) の批判に対しては、風土概念の社会的と言える側面(つまり、社会秩序はいかにして可能かという問いに風土概念から答えようとしている側面) に、倫理学的な要素(どのような社会秩序がなぜ望ましいと言えるのか)を求めていることで生じていると言える。先駆形である論文「風土」をはじめとする一九三〇年前後の和辻の著作を読むと、和辻が風土概念を通じて望ましい人倫や所有制度のあり方を探究していることがわかるが、この探究は「風土」では前面化しない。むしろ、「風土」や『人間の学としての倫理学』では、「人々が倫理的であると価値判断している様態を観察する学としての倫理学」の探究が前面化している。「倫理そのものを括弧に入れてその社

会的なあり方を解明する」和辻の姿勢について、犬飼はむしろ知識社会学と呼ぶべきものであると述べている。この社会学（知識社会学）的な探究の部分に対して、風土の健全さ／不健全さの客観的基準を求めるのではない物ねだりと言えるだろう。

しかし、(二)のベルクの批判は、和辻風土論の理論的深化において重要な指摘である。先述のように、従来の『風土』評価においては、第二章で述べられる地理学的側面（「風土の類型」）と、第一章で述べられる存在論的側面（「人間存在の構造契機としての風土性」）を分けた上で、前者への批判と、後者への肯定的評価が多くなされてきた。ベルクは、『風土』の読解において、「和辻が風土性の人間主体のあり方を規定する現象学的なメカニズムを明確に定義しながらも「∴」、和辻自身はこの書の理論的でない箇所においては環境決定論のやり方を典型的な形であらわにしている」と述べている。森末（二〇一）⁽⁸⁾が指摘するように、ベルクが、自らの「風土学」(mesologie)を「地理学と存在論の総合」と規定するときには、和辻における地理学的位相と存在論的位相の理論的な乖離と統合の失敗が念頭に置かれていることは間違いないだろう。

一方で亀山は、ベルクが指摘するような地理学的位相と存在論的位相の統合の失敗は必ずしも生じていないと、主にフォイエエルバッハの身体論に依拠して示唆している。しかし、和辻はフォイエエルバッハの身体論を、「神の学」を「人の学」に転じ、「有」を「思惟」から救い出したものとして評価し、「人」は単

なる個別的肉体的な人ではなく、必然的に個人的・社会的なものであり、「人間」とならざるを得ないことを理解しているとしても高く評価している一方で、フォイエエルバッハは「我と汝」の関係を成り立たしめている間柄が何によって成立しているかを突きつめておらず、「人と人との間の実践的行為的な連関や、それにおいて成立する人倫的組織」がいかに生み出されるかという重要な点を論じていないという批判に亀山が対応していない以上、亀山の言説のみをもってベルクの批判が乗り越えられたいとするのは不十分である。そこで本報告はベルクと亀山の意見の相違がもたらす課題について、アーウィン・ゴフマンのフレイム理論との比較を通じて分析を行う。

三 方法・和辻の風土論と

ゴフマンのフレイム理論の比較

まず、和辻の風土論とゴフマンのフレイム理論とを比較するにあたり、なぜゴフマンが援用されるかについて述べる。アーウィング・ゴフマンは、日常生活における相互行為が人々によっていかに経験され、そして組織化されるかというテーマを探求しつづけた社会学者である。ゴフマンは、人々の行為がマクロな社会構造や心理学的な特性に還元して分析できるものではないと考え、ミクロの相互行為状況が独自に生じさせる秩序のあり方を考察することで、フレイム分析をはじめとする社会学理論を構築した。ゴフマンは博士論文のなかで、彼が依拠する

理論的源流についてデュルクームとラドクリフ・ブラウンの機能主義にあると述べているが、その全業績にわたってジンメルの影響を見ることができ⁽¹³⁾。そして、ジンメルと和辻は両者とも新カント派から生の哲学、解釈学、現象学へと向かい、また、従来の「個人」「主体」を自明の視座とする思考様式を革新し、「間」(関係性)の思想へと転換していくという同じ課題を有しており、和辻は『倫理学』において、タルドと並んで複数回にわたってその思想について言及している⁽¹⁴⁾。ただし、和辻が「間」(関係性)の思想から倫理学へ向かっていくのに対し、ジンメルはより詳細な社会認識へと向かった。このジンメルの方向性の上にいるのがゴフマンであると整理できる⁽¹⁵⁾。

風土論とフレイム理論の比較の上で焦点となるのは、ミクロな人間関係における相互行為秩序とマクロな社会秩序の間の関係性である。風土論において両者は連続的なものと見なされるが、フレイム理論においては明確に区別される。

四 考察…二者関係の秩序と

大集団の秩序の連続性／非連続性

和辻とゴフマンの共通点として見出されるのが、表現に関する視座である。まず和辻の倫理学が「表現」を手がかりにしていること、次に風土論もまた「表現」の倫理学の一側面をなしていること、そして、解釈学としての倫理学の手法の課題を、主に宮川敬之『和辻哲郎 人格から問柄へ』(二〇〇八)をも

とに確認する。

宮川は和辻の一九一〇年代末から一九三〇年代半ばまでの期間において一貫して、「表現」が特権的に重要視されていることを指摘している。とりわけ、『人間の学としての倫理学』(一九三四)、そして先駆稿である論考「倫理学」(一九三一)においてはそれが顕著である。和辻倫理学とは、「人間存在のありよう」を「問柄」として見る倫理学であるが、この「問柄」の実践的な関わり合いは、私たちが日常におりなす言葉・行為・伝統・見方などによる「表現」においてすでに表れ、了解されているのであるから、そこへの接近には、「表現」の解釈学的方法を通してのみなし得ると主張された⁽¹⁶⁾。

この背景には、「人間性」「理性」「自律的主体」などの中心的原理に基づいて、倫理的行為の体系を演繹的に構築する倫理学への批判がある。例えば、『人間の学としての倫理学』においてはコーエンが、「人間」という概念から、人間存在を演繹的に導き出す議論に対して、それは、対象として人間を扱っていることになり、主体として扱っているわけではないと(つまり人間を主体的な存在として捉えたことにはならないと)している⁽¹⁷⁾。

この文脈に沿えば、『風土』もまた、諸「表現」を手掛かりにして実践的行為連関のうちに「人間存在」を明らかにしている⁽¹⁸⁾。ただし、和辻は風土を単に実践的行為連関から組み上げ

られていくものとして捉えてはいない。和辻の風土論は、ハイデッガーの「存在と時間」における「道具的連関」を積極的に評価し拡大したものであるが、ハイデッガーは諸々の道具は、ばらばらに出現するのではなく、それ以前に「ひとまとまりの道具立ての全体性」から一定の「方向づけ」が与えられるとする。この「ひとまとまりの道具立ての全体性」という原理的な大枠を、和辻は「風土」の理論系に採用している。いわば、マクロな社会秩序がミクロな実践の秩序へと演繹される方向性も、和辻は示唆していると言える。

また、和辻が解釈学を倫理学の方法とするとき、解釈学における課題——ある人、ある集団において妥当と見なされている解釈が、実際のところどれほど妥当性を持つか、その信憑性はどれほどのものなのかを判断する基準を客観的に特定することが難しい——も内包することとなる。和辻は、ミクロな二者関係から社会構造を持つマクロな大集団に至るまで、人間（じんかん）を基本的に連続したものと見なすことにより、この課題を留保する。後述するように、この点はゴフマン理論との最大の相違点である。

次にゴフマンのフレーム分析について述べる。ここではフレーム概念について中川伸俊の整理をもとに概観し、ゴフマンにおける「表現」と道徳性の位置づけを確認する。

フレーム分析という手法は、ゴフマンの名著の一つである『フレーム分析——経験の組織化についての試論』（一九七四）

によって提唱された。同書で示された「フレーム」「フレームング」という語は今日、組織経営論、社会運動論、マスメディア研究などの領域で広く用いられているが、それらの用法にはゴフマンが提起したものとはかなり変化しているものもある。

中川は、ゴフマンのフレーム分析の要点を次のように整理する。ゴフマンは、人が現在進行中の出来事の経験を意味が通る形で組織化するにあたり拠り所にする解釈枠組みをプライマリ・フレームワーク（以下、PF）と呼ぶ。これは「それに先行する何等かのオリジナルの解釈に依拠したり立ち戻ったりすることなく、主体の経験の組織化に使われる」フレームを指す。挨拶、買い物、食事、通勤、授業、競争、警察への通報など私たちが利用するPFは無数にあり、私たちはそれらを自然に、反省的態度を介在させることなく利用して日常生活を送っている。さらにこのPFは変換されることにより、演劇や小説、練習のためのシミュレーションや自己啓発のためのロールプレイ、セリブレイティがチャリティの模擬店で売子をするなどの活動を可能にする。⁽²³⁾ こうしたフレームの変換と重層化によって、私たちは日常生活の多様な状況に参加し、認識し、そしてそのフレームをさらに変換させたり壊したりすることで日常生活を形成するとゴフマンは見なす。そして、これらの各状況においてPFならびにフレームの変換に関わる状況的規範、状況的役割はある一つの制度や原理、構造から演繹されるものではなく、行為者の相互行為、その表現 (realization) をもとにそ

の都度立ち現れるものであるとする。

和辻との比較のために、ゴフマンの「表現」について更に詳細に検討する。ゴフマンのもう一つの主著『行為と演技——日常生活における自己呈示²⁴⁾』は、「社会的出会いの構造——社会生活において、人々が互いに直接肉体をもった者として人前にでたときに存在し始めるようなさまざまな事象の構造²⁵⁾」を演出論の立場から分析したものである。そのなかでゴフマンは、表出(expression)の役割は自己の印象を伝達することであり、「パフォーマンスとしてのわれわれは、道徳の商人だ²⁶⁾」という提起を行っている。この提起は、諸個人がいてその後には多様な場面があるのではなく、諸場面があつてその後には多様な個人がいるという洞察に基づき、自己とは相互行為のなかで生み出される「劇的效果²⁷⁾」だとする自己呈示論に基づいている。ゴフマンのこの見解は、それぞれの人々が、互いの行為(実践的行為連関)と表現の配置を通じて主体として生成されていくという和辻の議論と近似的である。そして、生成された主体はそのフレームを変換したり壊したりするが、その動態にメタレベルから相対的安定をもたらすものも制度や構造ではなく、行為と表現であり、状況的規範・状況的秩序はこれにより成立するという理解も両者に共通する。

和辻とゴフマンの相違点として見出されるのが、ゴフマンが「相互行為秩序」と「社会秩序」をはっきりと区別し、前者に考察を限定する一方で、先述したように和辻はこの両者を連続

的、かつ相補的に捉えている点である。²⁸⁾

ゴフマンは、彼の考察対象が相互行為秩序に限定されていることを、『フレーム分析』の冒頭で次のように強調している。「この本は、社会の組織化についてのものではない。[...]私は、社会組織と社会構造という社会学の中心的な課題について語っているなどと主張する気はまったくくない²⁹⁾」。フレームリングが相互行為秩序に限定されている背景について、速水奈々子はゴフマンが自然主義的観察にあくまでも依拠し、観察者の立場から一瞥できる相互行為秩序を分析対象としていることを指摘している³⁰⁾。より具体的には、ゴフマンが「集まり」(gathering)を対象とするとき、それは社会制度との関連で分析される連帯ではなく、直接的に居合わせている二人以上の人間の集合体を指す³¹⁾。つまり、人々がどのように、制度的役割とは異なる、固有の状況的役割を認識し、担い、相互行為秩序を維持するのかという問いがゴフマンの研究テーマであり、フレーム分析もまた、集まりを形成する人々がいかに状況を認識し、日常生活を形成するかについての考察の一部である。

「人々が状況をどのように認識するのか」「人々が状況にどのように参加するのか」という問いで構成される相互行為秩序に関する分析を、ゴフマンは制度および全体社会としての社会秩序の分析と区別する。ただし、両者は断絶しているわけではなく、緩やかな連結があると彼は見なしている³²⁾。重要なのは、相互行為秩序がそれ自体として研究意義のある実質的な領域であ

るといふ点である。ミクロな相互行為秩序とマクロな制度および社会秩序に連続性を見る和辻とは、この点で大きく異なる。

五 結論…和辻風土論における秩序構築の構造の

整理、および今後の実践的・理論的課題

ゴフマンのフレイム理論の視座をふまえると、風土論においては連続的なものとして区別されることになかったミクロな相互行為秩序とマクロな制度および社会秩序を区別するという操作が可能になる。つまり、和辻が風土概念を、(A) 間柄に関連する諸「表現」を手掛かりにして、実践的行為連関のなかで生じた秩序(相互行為秩序)があるべき社会秩序へと拡大する方向性と、(B) 原理や中心的枠組みに基づいて倫理的行為の体系(あるべき社会秩序)から実践的行為連関の秩序が演繹的に構築されるという方向性が、間の思想のもとで、風土として、相補的に組み上がると構想していたという整理が可能となる。

この整理に基づけば、ベルクと亀山の意見の相違は以下のようにならめられる。両者の意見の違いは、フォイエルバッハの身体論、「我と汝」の關係に着目する亀山が(A)の方向性を、ギブソンのアフォードダンス概念をもとに「風土の客観的な歴史生態学的傾向」を構想するベルクが(B)の方向性を、それぞれ重視した結果だと言えるだろう。そして、和辻風土論において地理学と存在論の総合は、(A)の方向性から見れば身体という基体において成功しているように見え、(B)の方向性か

ら見れば統合のための中心的な原理が不在であるために(実際には風土論はハイデッガーの道具的連関をふまえた全体性という大枠を得ているのだが)失敗しているように見えるという整理がなされる。

以上の整理は、風土論の新しい適用の可能性を開く。例えば、SDGsなどのマクロな持続可能性の規範枠組みを、メゾな地域の規範のなかで、そしてミクロな人々の相互行為の規範のなかで再文脈化する上で、風土論が寄与し得ることが示唆される。つまり、風土論を通じて、歴史性と風土性がどのように表現されることでその社会秩序や規範は成立しているのか(A)、その社会秩序や規範からの演繹によってどのような歴史性と風土性が表現されるのか(B)という問いを導入することにより、規範枠組みそのものを反省的に問い直す視点をもたらすことが期待される。また、日本において、NPO/NGOや非公式なネットワーク、私的な活動が、公共圏において正統性を帯びていく過程(佐藤、二〇一四)において、「場の空気」の持つ状況規範的な作用(田中ら、一九九一)を、「集団的浅慮」(阿部、二〇〇六)に陥らずに活かしていくという発展的な課題を扱うことも期待できる。つまり、(A) 集団の実践的行為連関のなかで生じた秩序が、(B) あるべき社会秩序として反転する条件の問題として、「正統性や場の空気」の問題を捉えなおすことが期待される。また、理論的課題として、『倫理学』の巻における風土と規範の議論の分析が挙げられる。これらの検討

は、今後の課題である。

謝辞…本論文は、総合地球環境学研究所のFEASTプロジェクト(1420116)の研究活動の成果の一部である。

- (1) 例えば、本論文中でも引用・参照したものとして、以下の文献が挙げられる。オギユスタン・ベルク『風土の日本 自然と文化の通態』(一九八六)、篠田勝英訳、筑摩書房、一九八八。亀山純生『環境倫理と風土 自然観の現代化の視座から』大月書店、二〇〇五。森末治彦『環境思想としての風土論の展望』『相関社会科学』第二二号、二〇一一、五五—七五頁。嘉瀬井恵子『地域計画の策定における風土の意義』『21世紀社会デザイン研究』一二号、二〇一四、三七—四六頁。吉永明弘『都市の環境倫理・持続可能性、都市における自然、アメニティ』勁草書房、二〇一四。長島孝一『風土と市民とまちづくり——ちいさなマチ返子のものがたり』鹿島出版会、二〇一六。
- (2) 一九四〇年代から一九六〇年代にかけての飯塚浩二、吉野正敏等による批判がこれにあたる。飯塚浩二『飯塚浩二著作集(七) 人文地理学・地理学と歴史』平凡社、一九七六。吉野正敏『日本の風土の認識』『日本科学技術史体系十二』第一法規出版、一九六八、三二—九一—三五頁を参照。
- (3) 例えば、藤井聡『風土に関する土木工学的考察——近代保守思想に基づく和辻「風土」・人間学的考察の実践的批評——』『土木学会論文集D』六二(三)、二〇〇六、三三四—三三五頁などが挙げられる。
- (4) 和辻哲郎『風土——人間学的考察』岩波書店、一九七九、三、二〇頁等。
- (5) 高野宏『和辻風土論の再検討——地理学の視点から』岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要二〇一〇(三〇)、三三〇頁。
- (6) 犬飼裕一『和辻哲郎の社会学』八千代出版、二〇一六、二七頁。

- (7) なお、保全すべき風土の客観的基準については、ベルクがギブソンのアフオーダーズ概念を参照しつつ度々言及している。
- (8) オギユスタン・ベルク『空間の問題』ハイデッガーから和辻へ(一九九七)、田千登史訳『社会学部紀要』関西学院大学社会学部研究会一九九七(一四)、七八頁。
- (9) オギユスタン・ベルク『風土学序説』[二〇〇〇]中山元訳、筑摩書房、二〇〇〇。
- (10) 亀山、前掲書、一三三頁。
- (11) 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波書店、二〇〇七、一六一頁。
- (12) 同、一六三頁。
- (13) 薄井明『ゴフマンの「隠れジンメリアン」疑惑…従来のゴフマン理解の見直し』北海道医療大学看護福祉学部紀要(二〇)、二〇二三、七—二〇頁。
- (14) 犬飼、前掲書、四一頁。
- (15) 同、四二頁。
- (16) 和辻、前掲『人間の学としての倫理学』二五五—二五六頁。
- (17) 同、九四—九五頁。
- (18) 一九三五年に出版された『風土——人間学的考察』は、和辻が京都帝国大学文学部在籍時代、一九二八年九月から一九二九年二月にかけて行った講義の草案をとりまとめたものであり、「表現」が主題的に扱われた時期と重なる。なお、現在一般の書店で入手できるものは、一九四三年の改訂を経たものである。『風土』第一章の初出である論文「風土」は、『和辻哲郎全集(別巻一)』岩波書店、一九九二に所収されており、現在刊行されている『風土』と比較すると同論文が「表現」の問題をより主題的に扱っていることがわかる。
- (19) 和辻、前掲『風土』二三頁。
- (20) マルティン・ハイデッガー『存在と時間(上)』(一九二七)桑木務訳、岩波文庫、一九六〇、一三三頁。
- (21) 太田和彦『ハイデッガー道具論および和辻風土論の環境思想への

寄与——〔最適動線 概念の導入——〕『比較思想研究』二〇一二、四一—四九頁。

(おおた・かずひこ、風土論・食農倫理、総合地球環境学研究所)

- (22) Goffman, Erving. *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*. Harper and Row, 1974, p.21.
- (23) 中川伸俊「フレーム分析はどこまで実用的か」『触発するゴフマン——やりとりの秩序の社会学』新曜社、二〇一五。
- (24) アーウィン・ゴフマン『行為と演技——日常生活における自己呈示』(一九五九)、石黒毅訳、誠信書房、一九七四。
- (25) 同、二九七頁。
- (26) 同、二九三頁。なお、ここでのパフォーマンスは、参加者が何らかの仕方での参加者に影響を及ぼす挙動のすべてを指す。
- (27) 同、二四五頁。
- (28) 他にも、和辻が風土論において「自然」を主要な要素として扱う一方で、ゴフマンはそれに関心を払わないという相違点もあるが、バルクの批判と直接の関わりがないため、本報告では扱わない。
- (29) Goffman, 1974, p.21.
- (30) 速水奈名子「アーヴィング・ゴフマンの社会学——理論内在的分析と現代的展開」前掲『触発するゴフマン——やりとりの秩序の社会学』。
- (31) アーウィン・ゴフマン『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』(一九六三)、丸木恵祐ら訳、誠信書房、一九八〇。
- (32) 椎野信雄「E・ゴフマンの『相互行為秩序』を読む(第一部)その一」『人文学報』二二二二、一九九二、一〇五—一二三頁。
- (33) 本主題に関しては、以下の文献を参照のこと：田中国夫ら『空気』は行動を決定するか——行動の予測因としての態度およびその他の変数に関する研究とその展開『関西学院大学社会学部紀要』六三、一九九一、二五—五二頁。阿部孝太郎「日本の集団浅慮の研究・要約版」商学討究五七(三)、二〇〇六、七三—八四頁。佐藤直樹「NGO運動における『正当化』の社会学的考察——アドボカシーを中心とする環境運動と公共圏——」『武蔵大学博士論文、二〇一四。